

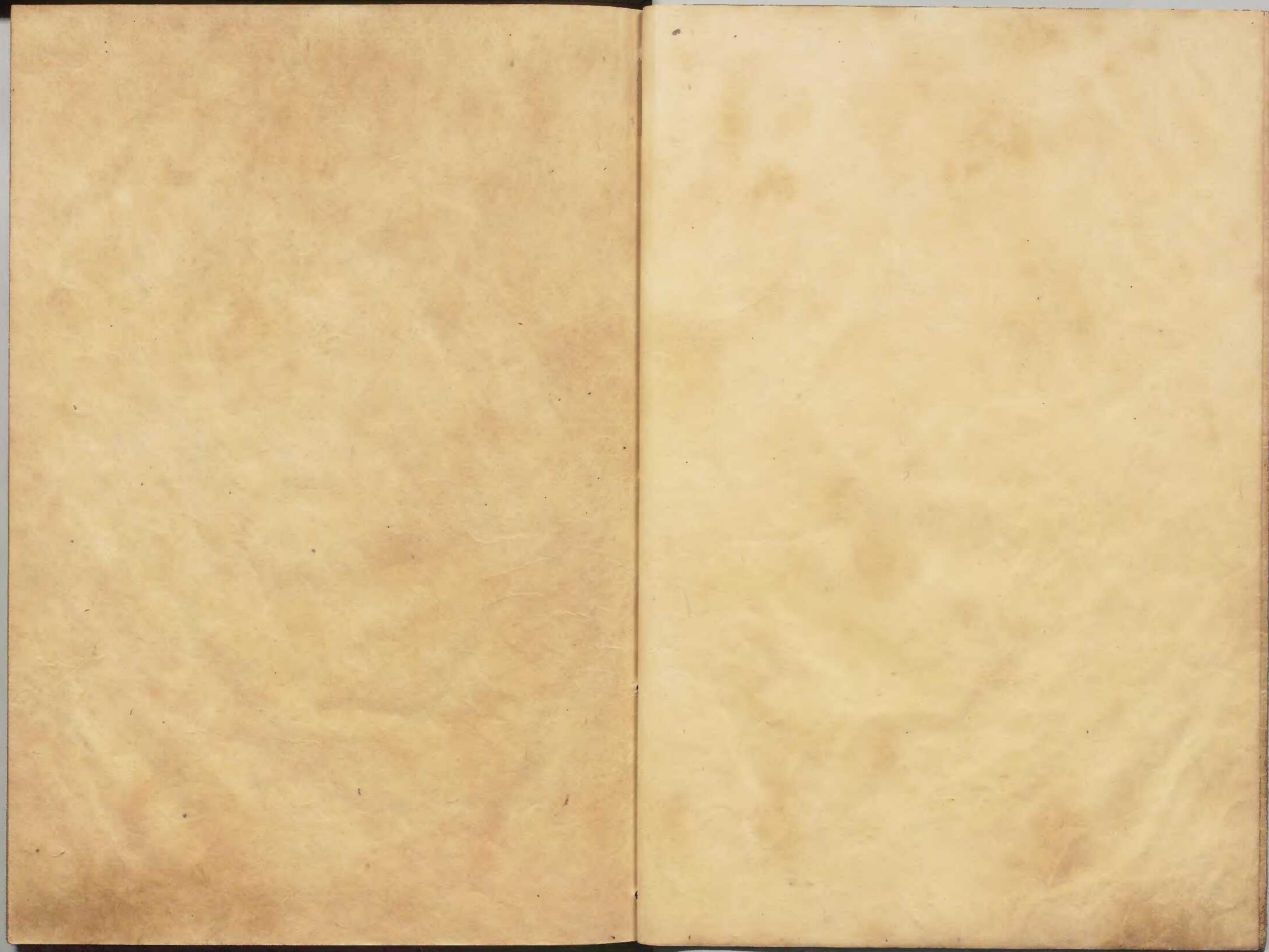
寛永諸家譜

藤原氏乙二冊之内一
良門流

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186(85)		
函號	特	76	1







上杉

加、凡

宅間

相、宗

矢部

中山

寛永諸家系圖傳

友原氏

乙一、家

良門流

上杉

大藏冠嫡男
漢海云

不比等

右大臣

正二位

贈左大臣

正一位

兵杖と、海、

氏、北、長者

淺草文庫

贈太政大臣 正一位
文德天皇此御祖父
天長三年又薨御 閑院の大臣と号御

良門

内舍人 正六位上

高友

内大臣 正三位

初修寺此え祖なりこれより下めて
初修寺中号と
醍醐天皇此御父内大臣

定方

勸修寺 右大臣 正二位
左大臣 三条と号御
醍醐朱雀の二代右大臣

物もの於お

左ひだり束たばの督とく 從よ三位い上じやう

為な輔ほ

於お中なかつ納のつ之の從よ二に位い耳みみ露ろ方かたと号なづと

説とま孝こう

播は磨ま守しゆ 正ただ四位い下げ

於お明めい

右みぎ大おほ弁ひん 左ひだり議ぎ

憲けん補ほ

大おほ内うち令さし 正ただ四位い下げ

威い實じつ

於お部ぶ令さし 中なかつ亮りやう 正ただ四位い下げ

皇憲

皇台文亮
正五位下
九少年
少納言

威憲

武部
正五位下

清房

お羽守
正五位下

重房

幕紋竹乃丸
武乾門院
飛雀二

新重

大膳大夫
法名性高
友中
系圖
皇太子

門院 隆人 公 氏

一トありて 冥東一トありし

憲房

秋名と号し 上秋兵庫次

上西門院 隆人 友本系圖一トあり 水部

門院 隆人 公 氏

京都 三条河原合我乃と号し 討死

法名 道諱 官正系圖 道勲と号し

道号 昌漢 院号 果院

憲房

氏部 大補 冥東北 爰領

康永二年 上列 臣列の守護ありて

應安元年 九月十九日 足利陣北討

卒し 年六十三 法名 道昌 道号 松

寺号 國清

越後の公と 二男 憲賢一トありし

憲方

山内安房守

りては右京亮

康暦元年四月晦日管領となり

之れより憲方が弟憲友が息男の房

と国東あふ松と管領なり

應永元年十月廿四日卒しと宋三子

法名道合 后号天樹 院号明月

憲定

山内安房守

りては右京亮

應永十二年八月十七日管領となり

同十九年十二月十日卒しと宋三子

法名長基 道号大令 与号光照

憲基

安房守

りては右京亮

應永廿九年二月六日發願とあり

同日二十六年正月甲寅年とあり

法名心元 道号海中 院号宗徳

憲實

安房守

憲基之孫とあり

實之憲基の伯父氏初大納言方の子なり

應永廿六年正月管領とあり

法名長棟 道号高岩

憲忠

右京亮

永享三年十二月廿七日御念ふとあり

生家一此とあり

大鈞 院号具運

房歌

共給が捕 又は憲志の中なり
氏列六十子陣よとひく卒と兼
三十二法名及純 道号清岳 院号
大光

房歌

四郎

房歌これとや一なりとみは実々
房歌が一族越後北守護相持守房定

か子あり

應仁元年後飯とあり

越後北國長森ありなりと討死

年六十七 法名可淳 道号若峯

寺号海龍

憲房

大郎

歌定あきさだこれとや—かひと子とて実まことハ

房歌むろたか中因晟なかつゆきが子なり

永正十二年えいせいじふにねん—後醍醐天皇

大永六年おほえいごねん上野の國うづのくに高上たかののり房平むらたけのへい升

陣ぢんにをい〜卒そらと兼かねあ十九じゅうきゅう 法名

道憲みちのり 石号いしごう大成たいせい院号いんごう珍洞ちんどう

憲寛

大郎

憲房のりこれとや—かひと子とて実まことハ

因東いんとう北きた清せい和わ源げん高たか基もと此こ子こなり 法名

得月とくげつ 道号みちごう石号いしごう

憲政

徳とく仁に卒そら志しとくのり景勝けいしょう山やま系けい三さん郎らふ也

家督をわくそふこれときい三郎右衛門
 領憲政が領より指差すれゆ小憲政
 せしむく越後の國よりとせしむ生家
 光永に天正七年三月十日なり

輝虎

彈正少弼 法名 護信 權大僧都 法皇
 不識院 号と
 實々 桓成 号と 立代 信守 府内 軍卒

良文六代長尾次郎景弘が亂佐徳吉
 為系が子なり憲政上松北称号ありびよ
 後領職とゆつふ
 永祿二年三月輝虎憲政が家督と
 法皇酒倉八幡より一をひく後領
 天正六年三月十三日逝去 年号十九

景徳

越後守

源正少將

輝虎

子と実の尾

越前守政系の子輝虎が姪なり

天正七年輝虎が家督をつぐ

同十六年五月廿三日正五位下より叙

正五位上を授けられた

文祿三年正月廿日正三位上叙せられた

宰相より任じ

同十月廿日右中納言小任下清和家

より任じられた

元和九年三月廿日逝去歳六十九

法名宗心院号覚心上

定勝

源正少將

元和九年二月十二日正五位下より叙せ

これ侍従子御也

同年五月十六日

右徳院殿小湯前一キくリんリ東播磨

督とつぎ并礼也

寛永三年八月十九日百八こえとのたのやを清指かぬ

信也

幕政重座が下りりんくく

慶長十九年ちし搦野大坂志直野合戦のの

と義景勝が家人軍切あはりりり

翌年

東照大権現御威状をいふるもの三人

これ

今度お搦野大坂志直野表防

戦に別を於て骨折れし御

此に仕合威思食下や

寛永二十年
正月十七日

扶原常陸公

えど ちり ねら ー ぎ の おしよ
と度お振列大坂志巨野表防
我々刻 画 粉 骨 補 妙 細 結
象 祇 高 名 威 思 命 下 や

委令二十年

正月十日

次田大炊師

今度お振列大坂志巨野表防
我々刻入精々 威 思 命 下 や
と 渡 達 之 通 威 思 命 下 や

委令二十年

正月十日

鉄原丸末つゝ

許領物見

一 吳 服

一 重

一 黄全 いんぜん

拾枝

松原常隆外

一 吴眼

一手

一 沙腰物 いさごもの

一 腰

次田大炊外

一 吴眼

一手

洪孫丸外

已上

加八爪

● 朝定
しやうてい

上杉弾正少弼
うへすぎたけのせいりゆう

顯定
けんてい

式部大輔
しきぶのちゆうぶ

扇名
あふぎのな

伊豫守
いよのまもり

法名希歌
ほうなまのきか

氏定

源正少弼

相顯

中務少輔

八条と号と

法名明新

滿朝

八条 修理亮

滿定

兵庫助 右京 中務大輔

政定

修理亮

今川範政内縁あるふは内々政定を

や一なりひく子とて是れは父

滿定小幼とこれくは是れは父

忠定

しつ後引くしりく居しと扱を
あつため加ふ瓜と号と

右京亮

遠江山名北庄新池々と飲初と

改泰

右京亮

明應六年と川上郎氏親新池郷と飲
知と人ま此寺をさつとい悔りしり
とあり

泰定

右京亮 敬八

天文三年と川氏輝と新池郷と
飲知と人ま乃寺をさつと
同六年と川嘉元新池郷を飲と

魚を此半をあげて

同十年新地郷の領知よをいへ
好婿此所人ありといへども相違
なく領知よを此状を承えられを
さつ

政豊

佐分守 童名子増 法名松月
政を十米のりきし又奉定七久保よ

をいへ粉骨をつりて紙をかり
おとさし秘伝知此事おせり候
らざるの自天文十六年義えり
政豊小書をりて

永禄十一年

東照大指現を列涉出陣乃水久
涉速水にて巻列の境小指し
りり修を國中よ入じりて
たまふ

政尚

隼人正 從六位下 備後守
若年

大権現につくたくまら

天正十二年尾列長久手合戦此とき
敵を討捕

大権現相列奥列九列教度此陣
供事 法孫小法師

法りて家

慶長元年城列依んて卒
法名宗漢

保忠

中々忠 生國武苑

大権現此鉤命ふつて亦祖又改豊が
娘子と形なるがゆつて保忠初と成
りつて杯号とも実を眼初源系

保次が子なり保次が父を源光永保成
なり保成が父を源光永保成といつれも
大指況まつたきまの保正の三方衆
我場になむく岡田と保成を尾列
蟹江の城とていへり討たむ

忠澄

氏初少輔

慶長七年氏列江戸北御城とていへり

右徳院殿首服とていへりたまり御諱此
字とていへり甚しき忠澄と号に
同六年

右徳院殿少輔文より本首領と
清上洛此とき佐をせり大坂より

いへり

大指現よりいへり此よりいへり

いへり

同十九年大坂陣の時より使者

光明ありて毎日陣中をめぐり見る
元和元年六月七日大坂合戦此とき
涉使として

白鹿院殿此涉前へ信一合戦此等
策信の首を奪ととをさしびて徳軍
先手此人殺を配へされり一命小
うわく流矢に相討ぐもさく合戦
し下りたるのとき忠澄敵をつきあせ
ま首を下りよとせしむ

同年十二月従六位下り叙一氏於楊
一信と

寛永十七年涉使として肥前
長崎よりあり英國よりきこる事あり
ん此邪説教十人と斬罪して其
奴を焼一つじ

寛永十八年六月十六日築山にて卒す
法名宗黒

忠澄

甲斐守 生國後河

將軍家よりつとむる

寛永八年 従六位下之叙 甲斐守

一信長

同十年 涉小姓 従六位下之叙

同十六年 上之叙 従六位下之叙

あつとめ 蕃政とせん

信澄

守右衛門 生國氏列

寛永八年

將軍家より賜 一とつとめ

同十六年 涉書院 蕃とせん

定澄

木下之物 生國氏前

寛永十一年

將軍家より賜たまは

同十六年沙門院番と家取

家紋 竹丸たけまる 舞ま 蓑かさ

宅間

宅間
宅間心前此祖上松系図小松
かむがゆつししれを略す

良門より十三代
重房

勅依方

と松水号

修理大夫

左束手

親重

上松大膳大夫 水安門院為人
關東小下向と 文成乃達者為人
法名性為

憲房

松若小し号以 丹波上松 長庫以
上西門院為人

京都にて東河系北合我々との付
法名道鉄 道号若籍 与号瑞光

憲殿

氏部大輔 元名安房守
關東北管領
康安二年上列 皇列越列木の号後
中

應安元年九月十九日足利陣了

憲藤

とひく卒と年六十三 法名道昌
道号極山寺号國清
國清寺を建立す

中務少輔

建武三年三月十八日渡部
とひく討死す一筆

物房

彈正少將
關東北後領長初少輔往憲と友策
信列統列乃守後より法名常春
道号得元

物宗

釈迦堂 中務少輔

應永二年正月あき後あき領あきと形あき

鶴つる尾お北きた越こ守まもりり

同廿二年八月廿六日あき結むす列り也なり栖すま山やま

ををひひくく逝し去す法は名な禪ぜん肥え道だ号ごう

相さう龍りゆう寺じ号ごう德とく泉せん

氏憲うぢけん

右みぎ形かたち依よ

鶴つる尾お北きた越こ守まもりり

應永十年九月あき言こと小こ後あき領あきと形あき

同二十年正月十日あき言こと下くだ別わか南みな坊ぼく

一ひとししくく滿みん隆りゆう持もち伴ばん小こ志し了りょう心しん心しん

くく同どう時とき一ひと討う死し法は名な禪ぜん秀しゅう号ごう

日ひ山やま

氏物うぢもの

丸まる子こ物もの早はや世せい

京きやう都と一ひとつつふ

氏歌

仲理亮

憲方

伊豫守

應永二十四年正月十日

をひく討死

憲春

大郎

憲基がれ子 高下をひく討死

持憲

中務少輔

京都

快守

大納言 法下 鶴見北別当

氏憲とむかひ 少佐討死

禪 欽亮

氏憲とおかひ 討死

憲將

兵庫氏

貞治五年六月廿六日

僧可

前建長久庵和尚 佛宇大光禪師

如とくあり

應永六年正月廿六日寂と志あり

六十八歳

憲賢

継任次郎 子世

能憲

宅間六郎少輔

園東北後領伴臣守重能や

子と

報忠と建立一應安元年十月

十五日一休書

永和元年七月十七日小石寺 法名
道諱 道号致裳

憲盛

伴家守 上校が系圖小石安房守憲方と稱す
康暦元年七月晦日叡殿と稱す
應永元年十月廿四日一死
六十歳法名道合 道号永樹
院号明月

憲春

刑部大輔 一死を稱す
關東北叡殿と稱す
康暦元年七月七日一死
法名道珠

憲英

飛人大夫
奥列の叡殿と稱す

憲系

葛見 丸を拾登

京都一いつふ

くどめは物房親老の孫なり

越列の守儀梅山より相續止海

より一憲方杉子より下迄總を

格ぐる候より道世と

道号大を道久唐白 将神店

如三梅子

應永二十九年十月二十六日

伊豆大見よりとひく寂を

めは七十二歳

房方

氏部大史

くどめは物房の孫なり

越列此守儀憲系が孫子なる

實は安房守憲方が息なり

越列此有後

應永廿八年十一月十日死
又十日某 法名道越 道号大法

物方

高倉 左馬物

應永廿九年十月十四日京死
子ひく死 法名道堅
后号密棟 保真院

頼方

七郎

永享四年二月死

清方

十郎 兵庫

憲實

憲基 子管領
法名長棟

重方しげふ

三郎

叔子しよし道世みちよ法名ほつな道悦みちえき

来

六郎

来

十郎

憲光けんこう

應貞おうえい左馬助

奥列おくり北きた後ご飲いんとと水みづ法名ほつな道盛みちもり

道号みちごう光山くわんざん

憲國けんこく

只懸ただか兵庫助ひょうごすけ

憲輔けんぽ

只懸ただか六郎

憲長

秀人三郎 松岩と号す

憲茂

六郎 越岩と号す

憲信

六郎 右馬助 法名性次 巽剛
と号す

憲親

七郎

房憲

三郎 右馬助

憲孝

宅間長庫物

長初少輔 能憲が孫子なり

明徳三年九月廿六日 死す 女六歳

房方

氏部大補

憲業が親子より及ぶあり

憲定

山内 安房守 うすのくにのり ひとしほ 左衛門

應永十二年八月十七日小笠原領より

同十九年十二月十日より死す

三十八歳 法名長基 道号大念

寺号先照 先照寺を建てる

憲重

山内 左京亮 越後守小僧

憲基

山内 安房守

應永二十年二月六日没領より

鶴見惣持あり

同二十六年正月四日死す廿七歳

法名修元 道号海平 院号宗海

義憲

同二十六年宗徳院と建云々

依竹丸と物 大京大夫

右馬頭義憲 やーちひく子

道徳と相續とあり 依竹丸

号と

憲實

山内 安房守 雲洞庵と号に

憲基やーちひく子と実々

氏部大輔房方が息あり

應永二十六年正月小叟飲職と

号と

寛正七年三月六日因防とひて

号と 法名長棟 道号高岩

憲忠

山内 右京亮

僧

周岱

亨德三年十二月二十七日德念

とひく討死法名長鈞院号大龍

院号大龍

僧

法亭

僧

房歌

山内 法名道純 道号清岳

院号大光

歌定

山内

房歌や一子少子少

父之房歌が一族なり

寛正七年二月十二日子陣小

をひく死

重影

上杉修理大進
伏見院為人

重友

大茂権少輔

物定

彈正少將

重行

左近将監

建武三年三月十日青渡色河
をひく憲友と相ありと云十七歳
をひく死

物定

伴後守 いよみ 武部大夫定友 たけべのちかぢ

物定 ものさだ やー や 子 こ 定 さだ 友 とも

友成 ともなり 子 こ 成 なり

應安三年 えいあん 建徳寺 けんとく を建 た 立 た 三 さん 年 ねん

同八年 どうはちねん 四月 しがつ 二 に 日 にち 丙 ひょう 子 し 辰 しん 法名 ほつな 希 き 顯 けん

院号 いんごう 靈 れい 岩 がん

物定

八条 はちじょう 中務大輔 なかつむの大輔 法名 ほつな 明 めい 新 しん

満物

八条 はちじょう 條理 じょうり 亮 りやう 童名 どうな 珍 ちん 僧 そう 丸 まる

満定

九条 くじょう 中務大輔 なかつむの大輔 兵庫 へいこ 以 もち

房藤

掃部卿

氏定

房藤 彈正少將

歌定が頼子實之頼歌が子なり

氏定は頼子なり

應永二十三年十月の夜決り

多ひく切腹を法衣常繼 道号

仙巖 院号普恩

持定

房藤 治部少輔

氏定は頼子なり

定頼

三郎

高運

持僧正法下 一位大僧都

氏為北國司

氏春

長合

兵庫物

應永二十四年正月十日

満隆持件

氏憲

於

小山田

大内大輔

法名道松

道号

高岩

定重

小山田

修理亮

法名聖機

道号

青山

定教

小山田三郎

女

浄加、白 憲房、子

重能

上杉 伊豆守

兵庫以憲房が、子実を、初修寺文
津入道が子、引付一番此上人
皇列の守護

建武二年八月、執忠寺を建之

重忠

貞和六年十二月廿一日、越前を以て
自宮と、法名道宏、号秀峯
号執忠

宅間、此元祖、左京亮、修理亮
憲房や、一がひと子と
建武二年、執國寺を建之
隠居と

能後

宅間 左衛門 依 引付一番北段人

應永八年十月晦日一死

法名道高 道号妙山 執國寺檀越

憲清

掃部 助 三峯寺 越列小僧

氏名 國司

憲重

助之郎 援下掃部

憲家

掃部 助

憲元

助之郎 長幼少輔

越列三峯寺

憲貞

九京庵

淡路守と稱し陸奥守

了

許之守竹鶴長北也

永享十年十一月金澤を以て

自害

憲重

揚部卿

淡路守

持成

小右衛門

資永守と稱し自害

憲重

四郎 伊豆守

奥列し法

應永三十年五月十日

法名通得 石号資山

憲俊

讚岐守

正長元年五月廿二日

法名后嘉道号悦堂

憲徳

讚岐守

憲時

左衛門尉

統業

長

貞清

正壽

物重 ものしげ

讚岐守 さぬきのさむらひ

定憲 さだけん

兵部少輔 法名永三 ひやうぶのさうぼう ほうみょうえいさん

統元 すたもと

定朝 さだとも

掃部物 さうぶもの

畧重 りやくしげ

十郎 法名宗剛 道号吟憲 じゅうらう ほうみょうそうごう どうごうぎんけん

宗國 そうごく

修理亮 法名見云 道号德彦 しゆりりやう ほうみょうけんぐん どうごうとくひこ

院号書光

憲方

三十郎法名 胤云 院号書山

院号書樂

相列山内此店よりと云く 宗國山

徳翁寺と建立之也

房成

兵庫物

永禄七年高卷よりと云く 村丸

法名高順 道号目室 寺号長雲

憲總

又十郎

百物

九清門依

父房成と一所より討死 法名常見

院号玉貞

規箇

治部大輔

小泉氏連より子

規次

二郎

檀越

元和七年正月十日百小死年六十三歳
法名源廓 通号頂登
氏列都築於二俣川村峯鶴山三佛寺

忌次

仔細

天正十九年十一月一歳に...

東照大権現よりつくとくまのりぬ小姓と名

慶長八年因原陣此修ををつとむ

同年十二月左文字の清勝相と修修と

同六年

大権現此嚴命をうけとぬり新山此城小

をりし此増田左衛門尉が家次氏を

没収の沙汰とつとむ

同七年春日明神齋院と清建立此とき

領をけりゆりて清貞相ととるてと事と

法とむ清道美の功をを依此日まゝ貞

物と木とむ

同十四年伊達政宗と陸奥守より修せ

らうと名 上使とすわく奥列り

をりじき 上さ乃自代直を

同十九年大坂清陣の修ををつとむ

翌年乃清陣よりともうさ修を

そはくち

右酒院殿とつとくまらる

元和元年二月十日百錢の價法制乃

倣り法々々仙波七郎丸島吉種と

おたりく束放りり法々々

寛永三年二條より 仍幸此とま

大番北廻以九人鳳輦北修を志次

その随一ふりそはち

將軍家より法々々々々

同十年十一年蒲原法殿の法作り

奉行と仰付られ法々々々々

られ黄金時服とたまふ

同十二年同東國殿巡檢北沙法仍

法々々れ黄金時服と仰付と

寛永十三年京放二條の番とつとむ

少々九月十日より死と六十歳法名

道的 后号一廓 院号深海

系

右馬助

早世

憲務

三九束人村

早世

富重

三十郎

系

十郎

早世

富勝

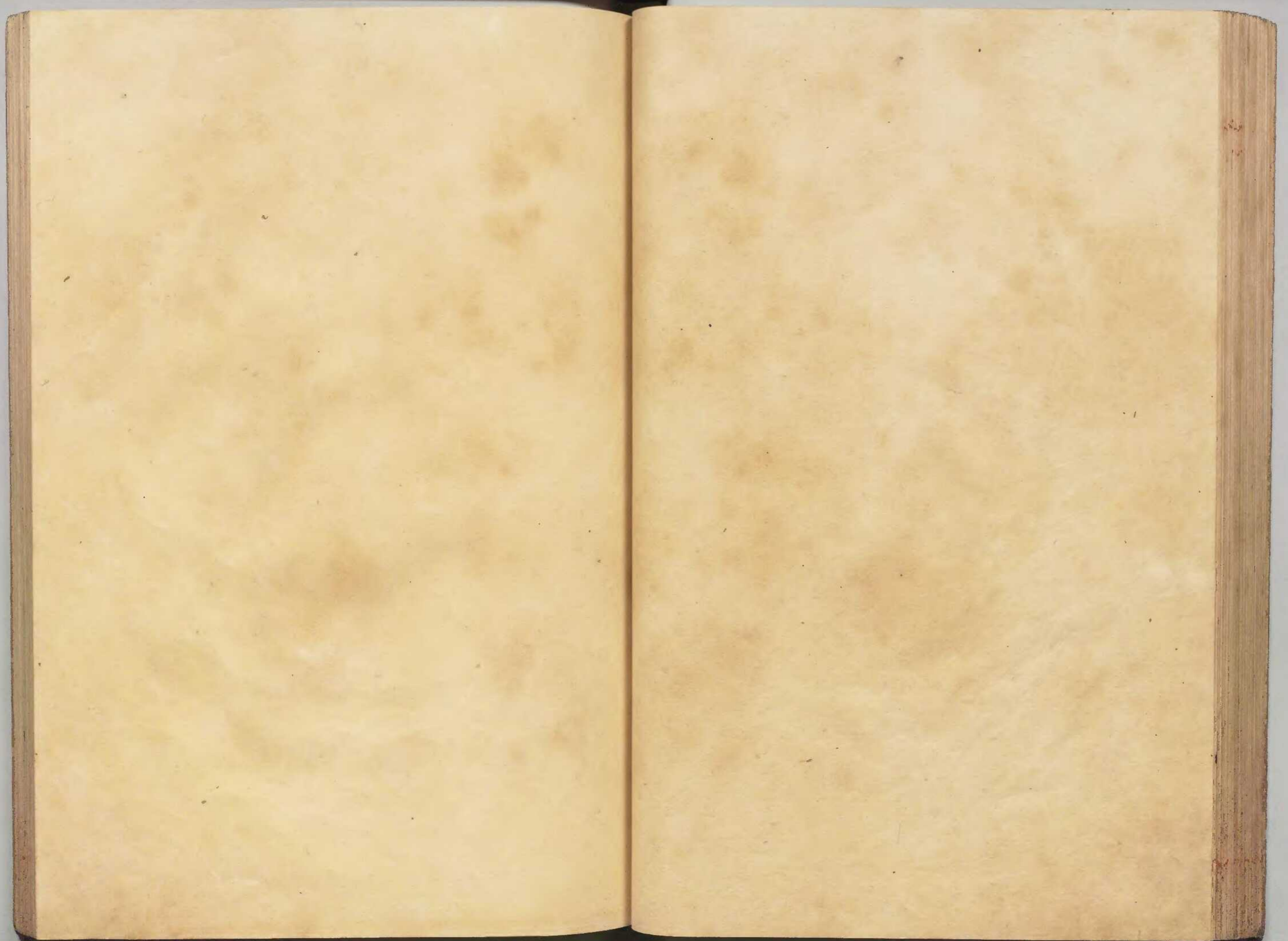
内務助

系

七郎

早世

家紋竹の丸小舞雀



物比宗

家傳りいらく良門三代境中納言
兼備後河の國司となり在國の時
子とまうけ政治の良物比宗はよ
やうめをくそれ子はり物比宗を
給して氏とん子孫世々安し
石印と

● 後永 しんちが

丹波守 しんたけ 中國後河 ちゅうごくごが

元長 げんちが

丹波守 中國河内 信名祖 しんなん
今川氏親 いまがわうぢか ちびり 義元 よしか よつふ

信置 しんぢ

後河守 ごが 小名友三郎 せなともさぶらう 信三郎 しんさぶらう
あゝと心 又云兼大夫と号し 中國河
内 今川義元 いまがわうぢか ちびり 小氏 せうぢ 志 し

了

天文十七年 義元 織田 弾正 忠信 秀
冬 列 小豆 坂 一 志 合 我 此 志
信 五 少年 たり とも 敵 陣 一
言 を す め 今 川 一 志 今 日 を 少 り 大 一
我 切 と 今 げ 事 為 度 たり け 死 一

義元感状とさづ

永祿六年を引引るに飯田合戦の

中より敵兵殺さるる信玄只一勝

敵陣より入大りこれをやが

小山と仰ふれと討捕うにさひく

氏其感状とさづ

ある所共草を不敷りありゆ

事あり信玄か回心をびり歸

相うしく勝利をぬりこれと

氏其又禮文とさづ

同去年氏其没落の故氏回晴信小

治之後河國志太郡富士郡菴原郡

安部郡の角をびりを引甲列

此うち教箇取と飲トて後引持船乃

城より行とびと記晴信血判の折事

とさづこれ疎略あるより此自

甲四十二年晴信位の子とゆると

りわく信玄と号す

天正十年織田信長大軍ををり
甲列をせしむるに勝頼が骨肉の信
信長より命を賜はれわたり信長
を返りて勝頼を討つて勝利
をうりてふときくありよとひく

東照大権現の初め酒井左衛門村石川
伯耆守よりひり酒目付酒井氏家
持取乃城とわたり妻子と唐衆
是れをくそのうち甲列小をせしむ

勝頼より命を賜はれわたり信長
を返りて勝頼を討つて勝利
をうりてふときくありよとひく
信長乃より小身命と命を賜はり
法石堂

宗利

たを 生國同あ
母を飯尾をあ守の女

天正六年石川伯耆守教正後河内
山内一を敵一を自らをい
相つては勝りたりふとて宗利
少なききくひく切なり

同十年父信直死に後

東照大権現後列々入河の時なり

おそれくつくくまうられ信直
もや持私の隙をもちゆふ今赤七
は 佐とがうら

同十二年長久手合戦の時

大権現より志くひまうり敵と相
絶くあれを討家利りまう底とがうら
同十八年小田原陣のちま佐を
つとむ

慶長五年美原陣より志くひまう
大坂お度の清原より佐をとつとむ

大権現豊洲の夜

右徳院殿よりつとむ

寛永元年 作をかうりく
將軍家よりつくとくまらる

良明

細末の村 生國武苑

母を長郎二郎末の村の女

慶長十年めさるる

大指現より湯

大坂友度の所係り供を

元和二年

右徳院殿よりつくとくはつる

寛永元年 作をかうりく

將軍家よりつくとくまらる

同二年 食禄をくはる

同三年 三月十一日 作をかうりて

小十人の廻りれり食禄をくはる

きほり来地を領す

同五年 十二月 布衣を給はる

事をゆるぐ事

同十年十二月廿七日紙地きぢをくろくたふ

同十一年五月二十日紙きよよわてわて法事ほふし

院いん島しまの紙きひひとと紙きひひ

家紋かもん左巴さへ

幕まくら紋もん黒くろ白しろ青あお紙かみ紋もん

● 泰友

九条進

成田右典殿

永祿七年九月
仲列河
中鴻合
我此

水うき討死

朝比奈

堤中納言
為輔の
辰胤
なりと云

泰重

三良右衛門尉

穴山梅吉の所よりあり

天正三年六月廿一日参列長藤合戦

此より我死

正時

九世末尉

東照大権現沙加少尉にて後列之末

まはりて参列之末よりつりて参列

りて参列之末よりつりて参列

永禄三年尾列桶狭間合戦此より

沙加にて参列

元龜三年参列之末より参列

天正三年長藤合戦りて参列

此より参列我死より四月の十七日

湯里浦より穴山より参列

同十年織田信長が四條を征伐の
ゆゑに正時長坂十石を賜ふに甲列
柄杓小倉ありこれとき

大指現同必市川之陣をとりしとき
これ長河部長左衛門成敏長左衛門とき
ゆゑに幕下小湯一きしきしりり
後列奥津市山郷ときいし三十五歳
此食邑をさす

慶長十八年二月二十七日

正重

源六

天正三年二月二十日遠列
うまる

同十年又正時とたあ

大権現ときふんたて

同十年十二歳山

名徳院殿よりはく

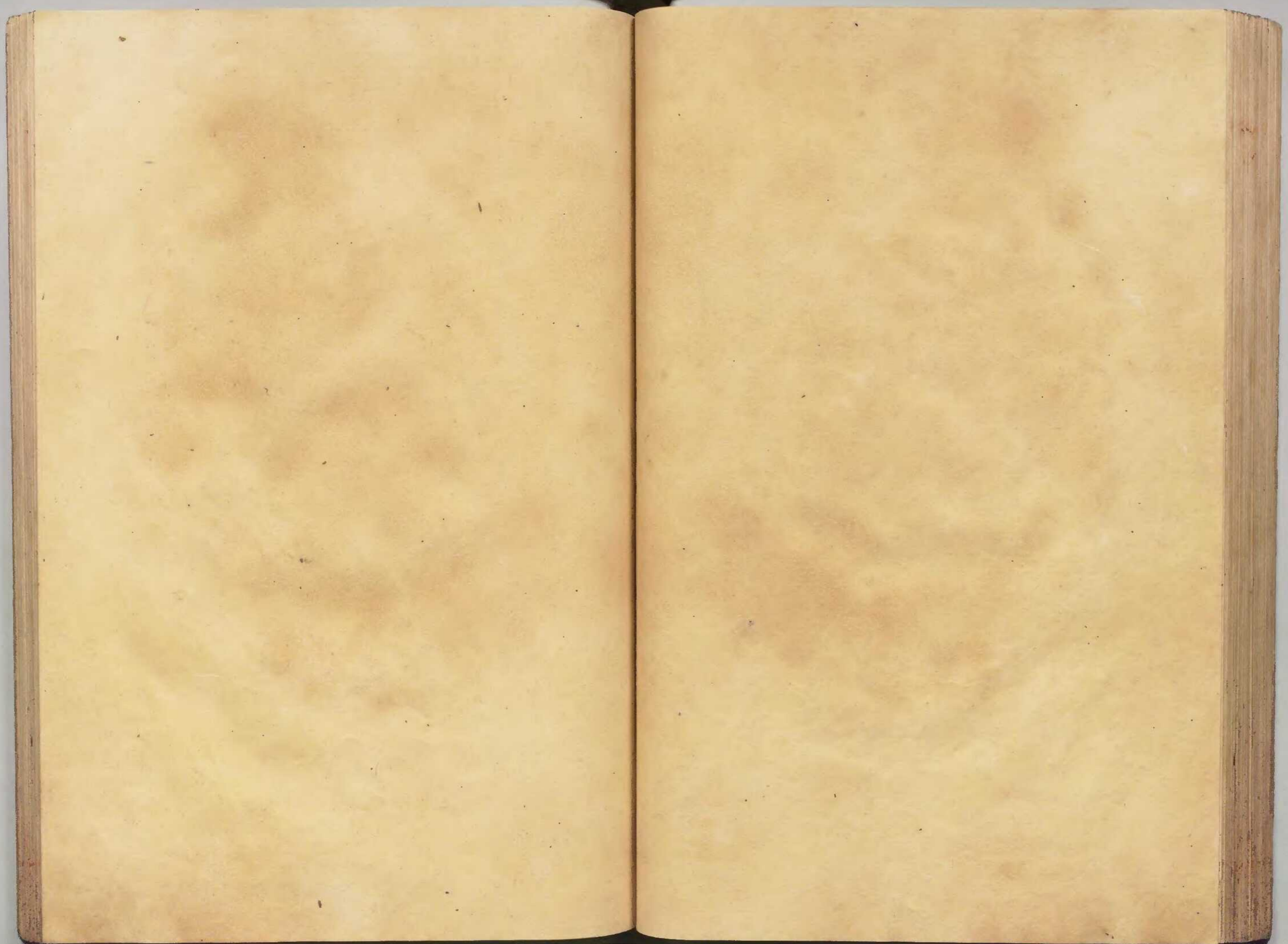
同十八年小田原陣に修平一相列中
郡ももつと三百石此領地をいふ
同年十月

白旗院殿の涉入海小旗守とまじり別
よもつと百石の領地をいふ
慶長六年志田涉陣此中記涉使
者二十人乃貞とそふりて親と指
石川八右衛門尉多次とわすどく先年の
取くとつと一たつとつと時り年

二十六

同六年四百石の飛とくえと海り
そつとつと三百石此加倍と許領と
將軍家此旨命ふりつと涉若法奉
外とつとつと千石の領地をいふ
いふ

幕級 善白取深横
家級也



朝比奈

● 某

三良右衛門
今川義元小つ人天正六年後列
遠目とをひく我死

右豊

久丸丸 廿四戌

寛永十二年

將軍家小つ人

家紋之頭左巴

果

朝比奈

河内守

生國後河

今川義元いまがわのよしたけつと人義元よしたけ氏田信玄うぢののぶひら也

蒲原ふはらよりをひく合戦あはせのとあ蒲原ふはら

の城しろ進すす手てさきさきりしり城しろを合あこ

れゆゆり義元よしたけ感書かんしょとさげくさ

夫よりあつて其の末に成をかりし

云ふ六年後河内國を討つと云ふ

大権現信玄と合戦のとき其の甲列

隊のうらよありと敵と相争ふ

山田平兵衛ありと云ふ

と云ふは云ふと云ふと云ふと云ふ

トゆ相争ふは云ふと云ふと云ふ

同十年甲列は云ふと云ふと云ふ

大権現より云ふと云ふと云ふ

同十二年長久手合戦のとき佐々木

と云ふと云ふと云ふ

慶長五年 嚴命と云ふと云ふ

右衛門殿より云ふと云ふと云ふ

佐々木

大坂を度れ陣小と云ふと云ふ

と云ふと云ふ

將軍家小つと云ふと云ふ

元和七年七十歳に云ふと云ふ

真正まこと

長七郎 出陣回所

長七郎

大指現おほさしげよりつてくまのり実承陣まことより

修承しゆじやう

同十九年元和元年大坂津陣おおいさかより

修承しゆじやう

元和二年

右徳院殿より流るるくまのり

同九年

右軍家よりつてくまのり

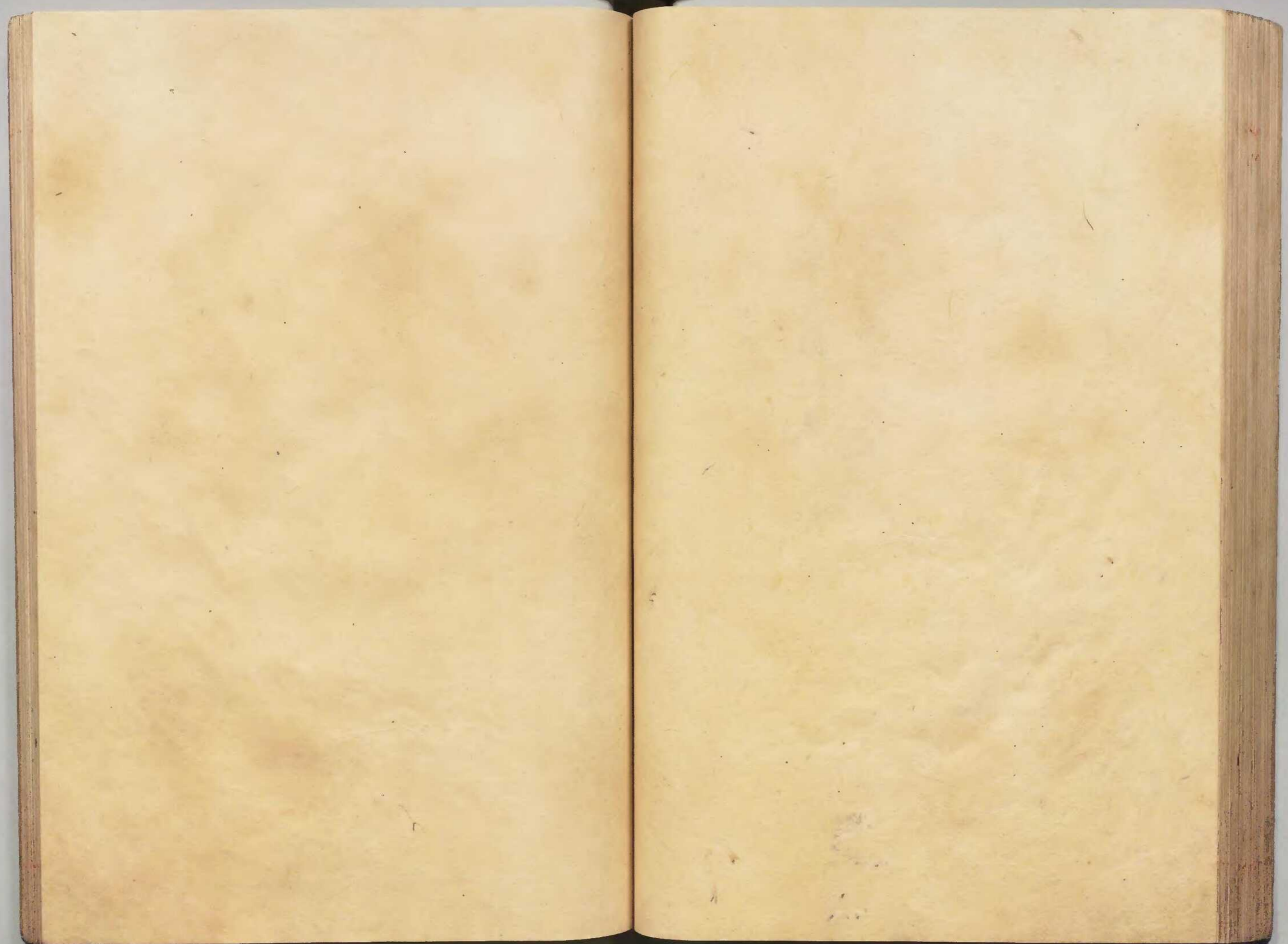
真眼まなこ

吉兵衛 生田茂院

大坂津陣北より

右徳院殿より流湯ながより修承しゆじやう

元和二年 修承しゆじやうより後河忠名ごごへたけな



● 集

朝比奈

丹波

生太甲斐

今川氏 憑と 比義元氏 真一

つふ

来

友九郎

返筑前と号す

生國後河

東照大権現よりつとて

待改

助大夫 生本同前

大権現

右徳院殿よりつとて

寛永六年十二月に死す八十一歳
法名一八

信猪

小十郎 生國同前

寛永六年四月に死す

猪之

初六良

生國相模

右 函院殿

將軍家小治久（そのころ）月（つ）る

寛永十七年三十八歳（り）て死（し）と

法名 廓傳（くわくでん）

勝行（かつぎょう）

傳九郎 生國成（いこくせい）

寛永九年九月

將軍家（つ）久（た）たて（ま）る

勝時（かつとき）

指十良 生國成（いこくせい）

寛永十七年

將軍家（つ）久（た）命（めい）小（こ）久（く）久（く）父勝之（ちちかつし）

志（し）認（にん）と（と）

信久（のぶひさ）

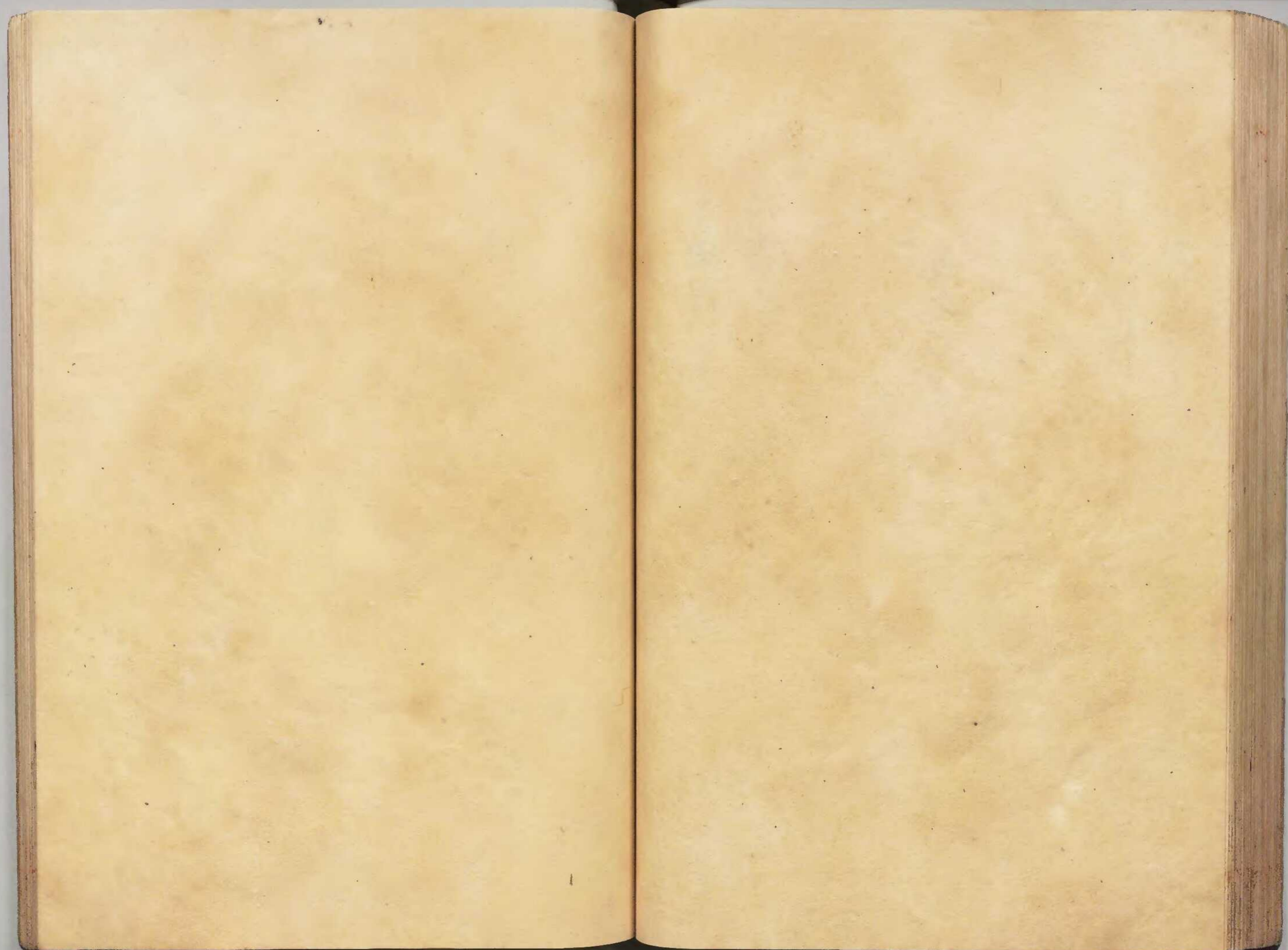
孫長政 生國成（いこくせい）

信勝ふたけ長なが子こ也なり安やす氏うぢ酒さか井い
左ひだり衛ゑ門かど尉ゑい政せい辰ちんがが是こゝ男おとこ持もち十じゅう良りやう子こ也なり
大おほ權けん規ぎ持もち十じゅう良りやう子こ也なり一ひと之の流なが小こ姓せいとと
今いまありてて紀き伊い大おほ納な之の
新あらた宣のたま今いま又また創つくりし流ながとと小こ浪なみ介けとと
越こゝろ後ご少すく拍はつ名な輝てる主ぬし小こつつ人ひと也なり
浪なみ人ひととと新あらた水みづ三さん年ねん之の十じゅう四し年ねん
一ひと之の死しとと
信のぶ久ひさ信のぶ務むがが家け督とくををつつき

右徳院殿

右軍家より侍人として

家の紋三匹丸也



朝比奈

昌是

友右衛門 甘國後河

武田信玄同後頼朝小治

天正三年冬列長篠よりとひく

二十一年行て我死

昌行

六九歳 生國後河

安永七年

右衛門殿少人

同十九年元和元年大坂御陣小

佐手一石給侍中身正次が継

一して首級を以て

元和二年 歳命よりわく後河

大納言忠也の少将

寛永十一年められて

將軍家につく

昌澄

八九歳 生國後河

慶長十二年

右衛門殿少人

同十九年大坂御陣北より江戸

乃御番をつとむ

元和元年大坂陣おさかの陣じんより本ほんに水みづの心こころが
絶たぎつ小こ屋や一いつく修しゆすすと

同九年
將軍家よりつとくつとくまつ

昌春まさる

太良兵衛 生小武藏いこぶさ

元和二年

白徳院殿小治人しやくとくいんどのこぢにんとくとくまつ

昌次まさつぐ

寛永元年かんえいげんより

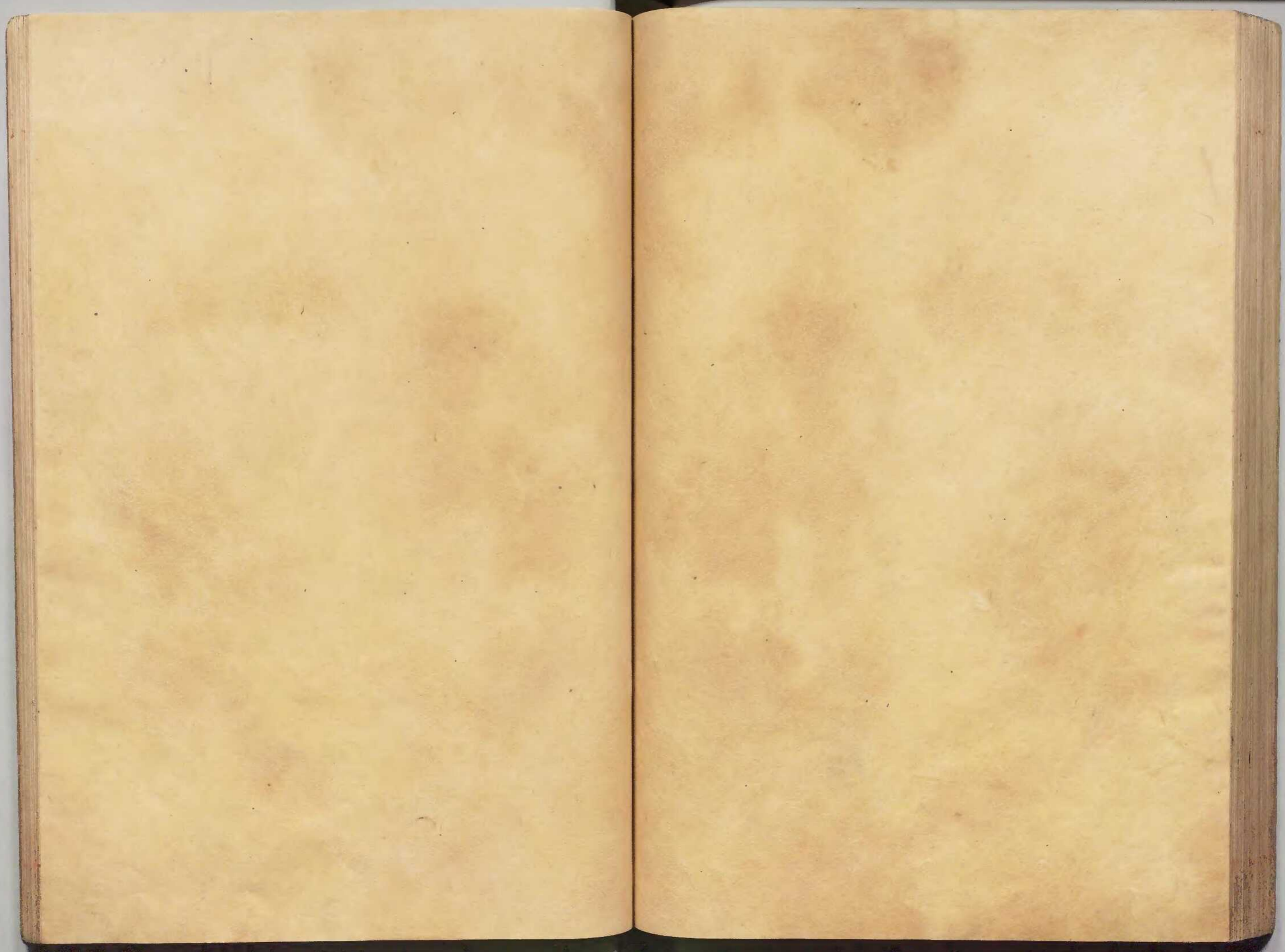
將軍家小つとくつとくまつ

新九郎 甘國武藏

寛永十四年

將軍家よりつとくつとくまつ

家紋いかり九巴く



物比奈 ものひな

● 正名 ただな

新八郎 牛國後河 にうくにの

小條美濃守 こじょうみのり 小つて使番 つてしばん とする

後姪物丸 ごまゝものまる

東照大権現 とうしょうだいこんげん 之流久 のりく ちかく月川 つきがわ 流 なが

うわく正名 ただな もまゝに後河 ごがわ 有り あり とす

大指現小勅仕——たぐりつ家

慶長十七年十月八日死と 法名

廣心

正重

新女良 ぼ小内記と号と 生年戌辰

正者昔て子やとて之を物比宗物奉り

子や中

右瀧院敷小つうへたぐりつりて大番を

法と心

寛永六年二月十四日死と年三十三

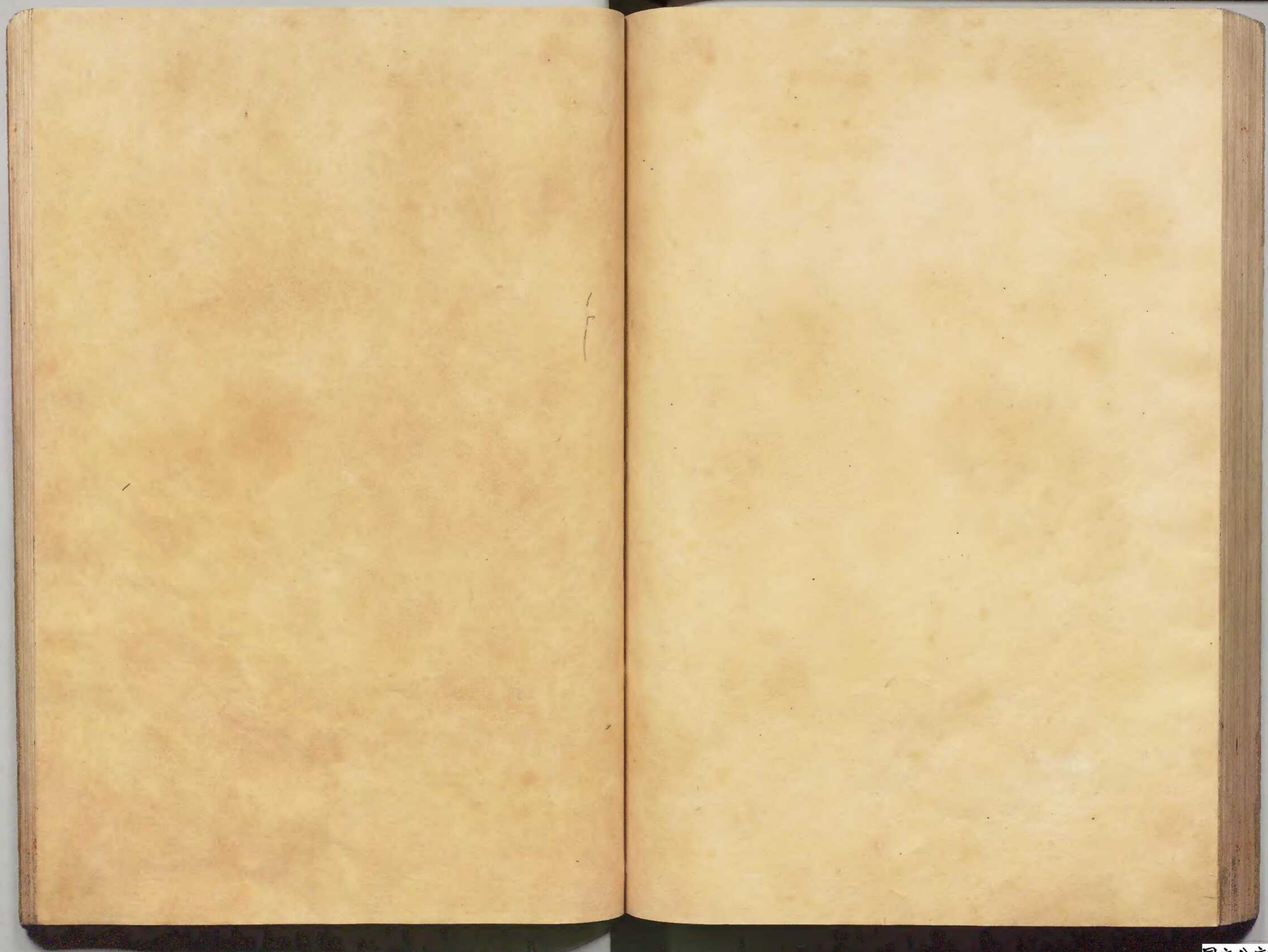
法名宗忠

正照

内祀 生國同前

寛永十七年二月大番とつと心

家級 九巴



朝比奈あそひな

● 泰重やちう

玄二郎

生必遠江なまはつと

今川義元いまがわのよしたか

泰勝やちう

源右衛門

生必後河なまはつご

今川氏真いまがわ じまことつふふあり

東照大権現とうしょう だいこんげん後河津ごかわづ入國いりくに此時このときりて

流ながる

天正十二年てんしゅう じふにねん尾列おひら長久手ながくで合戦あいくさ此時このとき

首級しゅけいを得えたり

資重すけしげ

赤丸あかまる村むら

文祿二年ぶんろく じふにねん十二月じふにがつ十六日じふろくにち奉命ほうめいしる

大権現だいこんげんより赤丸あかまる村むらへ

慶長六年けicho じふろくにねん九月くわがつ岡原陣おかのら じんより佐々木ささき

氏うぢ

同十九年どう じふくわにねん元和元年げんわ げんねん大坂おさかあり度々たびたび陣じん

陣じんより佐々木ささきよりあり

右徳院みぎ とうてん殿どの小つとくあり

同六年どう じふろくにねん後河津ごかわづ此時このときりて

同八年どう じふはちにねん

將軍家しやんぐん けよりつとくあり大津おほつ番ばんを

決_と心

資_子緒

加_云取 生_國成_為

寛永十三年

將軍家_一汗_湯一_一

同年十二月大_湯着_とつ_心

家_紋巴_夏

● 定則さだまり

射馬しやま 中國ちゆうこく 後河ごが 法名ほふな 道久みちひさ
今川いまがわ 氏直うぢのちか 一ひと つ子こ

夫部はなべ

家傳けだん 一ひと いい 一ひと 堤つゐ 中納ちゆうな 之の 兼かみ 補ほ 后ご 商しやう
ちりりちりり と云と云

定清

掃部 世國同お

一ノ谷氏美一ツふ

天正十八年めれく

東照大権現一ツ湯一ツくまら

茂列徳持村一ツをひく米地を流

文禄元年 釣命をかふ

名徳院殿一ツくまら

慶長元年 津細一ツ以新り同いんを
あつる

同六年上列 牛田村小をひく米地を
くまら海り且同いん七人をくまら
あつる 都合十二人なり

同十一年 総列子 桑那富我野村
一ツをひく米地をひく米地を
くまらまたまら一ツの取込不賛此
地一ツくまら一ツくまら

同十九年元和元年大坂友度元清
陣小佐守を法とむ

元和十八年より元和十九年
法上河守に

法上河守の佐守をつとめく息事

外

元和八年六月より小佐守兼六十七

法名目免

定務

七九巻

生玉成亮

慶長十七年

右徳院殿よりつとめたる御家

同年沙彌戸の役を法とめ食禄と

法とむ

大坂友度乃法陣より佐守をつとむ

元和八年父実法が法徳を法とめり

且同公十二人をあつめり父が役を

法とむ

寛永二年米地の法米平をあら
きめさせしむるに幕下此士大夫より
さすふと記定務りきこられん載せ
同九年

古徳院做費法乃後

將軍家よりつゝをてりしる

凡そ七十七年より寛永十一年り
しりく 沙と海たりび小日光法社
泰あひるを 沙曾將の佐舟をつとむ

定成

物進 生國同あ

寛七十九年

將軍家小つゝをてりしるを佐の列

くゝる

元和元年振米を海る

同三年食禄をくゝる

同四年沙細之改り同んぬ

とあつる

同九年 清上河の住年とつとむ
寛永三年 清入河の住年と
同五年 食禄とく人
同十一年 清入河の住年とつとむ
外日光沙社冬毎度住年とつとむ

定

自敵

定也やーなひく子と定は大臣

次良共東進利が子なり

寛永十七年

將軍家よりつとくまゝの家

定

格之也

定房

四良共東 生國後河

定務やーなひく子と定は仁科

清之良宗安が子なりく定清が孫なり
寛永十七年より

將軍家小つてくつてくつて

同十九年父定清とれたなりく没せ
はとむ

家の級た巴

● 祐則たすね

跡あと口くち成なり前まえ

夫那ふな

祐則たすね 之これと夫那ふな跡あと口くち成なり前まえと利き志しと
以もつて夫那ふなと

吉利

武家 上國武家
小幡氏政よりつふ

利忠

九郎玄来 上國同家
いづれ小幡氏重よりつふ
天正十八年小幡原没落乃ち

東照大権現より瑞

いづれ武家にとありてありて
号と

慶長十年十一月十一日

法名通直

忠政

藤九郎 武列江戸よりつふ
利忠や—あひく子に定はる

四長束村重吉が次男なり

実父重吉

この父名を新次郎のち四長束村とありしに

生國

相控 氏重より流ふ

天正十九年

大権現より湯——とくしはる

慶長十六年十月二十七日小死

年四十九 法名宗吟

重吉の父左束門村重次

を山丹波重景が井なり重吉の子孫

乃事々を山氏が系図より見えたり 右氏康小つふ

永禄十二年 氏康が七男小幡三郎重虎

上叔孫正少將輝虎が長子とありしに

重次ありしを——とくしはる

重吉と重吉と記名を母波とありしに

と輝虎の妹と娶

天正六年三月十三日輝虎が死す

よりうわくと重吉が次男重虎と

家督とありしを——とくしはる

ふ系虎はわより利とありしに

國府城こふのじやうより志望しぼうせきと紀き並なみ次つぎ系けい虎こ
か余ありりより敵軍てきぐんとやありてあ城じやう
より系虎けいこか妻子さいしところろ一いっ城じやう中ちゆう小せう
火ひととららららくく自殺じくわとと法名ほふな淨蓮じやうれん

系けい級きゆう丸まる餅もち

香山かうざんか系けい級きゆう丸まる内ない小せう二に列りやく

法ほふ級きゆう丸まる字じ

● 勝時

中山

家傳にいゝ高友十代中山
中納之殿此は裔なり

氏初大輔 尾列柳初の序よむ海

有舟右束の大夫忠正の婿となり

織田信長より 法名宗也

とひく六百石此領地とてさすまは
白徳院殿につくすまはつり大御番
北徳院とまはる

安永七年四月四日四十九歳にて
死す 法名道荷

勝儀

六年次 生母同お

安永七年

白徳院殿より法久とてつり勝当が
領地とてまはる

元和九年

將軍家よりつくりつくりまはる

忠光

安永東へ 生國同お

水野也とてつくりつくり

天正十二年尾列長久手合戦の地

首級を得たり後ち方劫をぬく事
同十八年相列小田原陣の討敵陣
より戦うちあり忠光これと記し
ありわつとありて首級を得たり
を良秀告これと賞し一時服毒に
合後をさす事

同年めされし

大権現より汗湯と

同十九年六百石北領地を汗湯と

同十六年濃列岡原陣小供を以
て同六年二百石北領地をくまの湯
と名づく七百石を領知し大治書
をつとむ

同年二十六歳に病死

重時

徳右衛門 牛國同前

大権現

清書をわしあぐん波山城守の職に
属し江戸之作しぐるを之れ書と
決む

元和九年

將軍家よりつとむるに大清書
をつとむ

寛永八年小普請の役をつとむ

忠
意

大田右衛門 正武院

寛永十六年

名徳院殿につとむるに

同年清切米とすめりるに大坂
度此御陣の役をつとむ

寛永九年

將軍家よりつとむるに

同十年領地とくまへりるに
大清書をつとむ

豊久

六大夫 生國同好

寛永十二年

將軍家につく

同十六年沙切米を伴領一太沙
番をつとむ

忠勝

茂左衛門 氏親江戸おじま

慶長十八年

大権現につく

継七百石乃地を伴領と

その反大坂を伴領小佐を以

元和元年

名徳院殿よりつく

同九年より

將軍家につくしきまのる

寛永十年領地加倍二百石をたす
旧領もふ九百石を領す

勝久

指丸丸 生國同前

寛永十四年

將軍家へ侍之きくまのり

同十七年沙切米をふまがり大

沙切

家紋

三文字松皮

